

# 戦争の経験を引きずる

## ——井伏鱒二「遙拝隊長」と傷痕軍人表象からみる戦後

市川 遥

### 1 はじめに

戦争によって心身に傷を負った兵士たちは、戦後をどのように生き続けたのだろうか。戦争とトラウマについて論じた中村江里は、「兵士として「人を殺せる」ようにトレーニングされ、死を前提とした日々を送っていた人々が再び市民社会に適応するためには、様々な困難を伴った<sup>1)</sup>と予測する。また中村は、トラウマを抱える人々は「二つの時計」を持っており、「一つは現在その人が生きている時間であり、もう一つは時間が経っても色あせず、瞬間冷凍されたかのように保存されている過去の心的外傷体験に関わる時間<sup>2)</sup>」であると説明したうえで、兵士たちに刻み込まれた「戦場」の痕跡や残った傷そのものから戦争を捉え直すことの重要性を指摘している。

資料の制限などから、地域社会での生活に戻った傷ついた兵士たちの実情を捉えることは難しいが、井伏鱒二「遙拝隊長」には、傷ついた一人の軍人の物語が描かれている。「遙拝隊長」は、1950年2月の『展望』に発表され、同年に文芸春秋新社から刊行された『本日休診』に収められた。以降、現在まで多くの作品集・全集・単行本等に所収され<sup>3)</sup>、井伏の代表作として知られている。

「遙拝隊長」については、井伏が明確なモデルのもとに設定した<sup>4)</sup>「いま尚ほ戦争が続いてみると錯覚して、自分は以前の通り軍人だと思ひ違ひしてゐる<sup>5)</sup>」元陸軍中尉、岡崎悠一の描写が注目されるとともに、長らく、敗戦後の価値観の急激な転換を描いたものとして読まれてきた<sup>6)</sup>。その転換を「手のひら返し」という言葉で指摘した栗坪良樹は「名誉の負傷を負ったおらが村の将校をおし立てて鼻を高くしようとした村人たちは戦時中はともかく、戦争が終ると手の平を返したように彼を厄介視し蔑視することになってゆく<sup>7)</sup>」と、故郷に戻ってきた軍人に対する村人たちの態度の変容、つまり銃後の転換について論じている<sup>8)</sup>。

また、先行論においては、主人公である悠一の分析が一定の成果を挙げてきた。戦前の教育における規範を手がかりとした分析<sup>9)</sup>、母一息子関係と立身出世言説に関する論考<sup>10)</sup>など論点は様々だが、特に「気違ひ」としての言動に関するものが多数を占めると言ってよい<sup>11)</sup>。東郷克美が「まず主人公岡崎悠一が気違ひとして書かれていることがもっとも重要だ。このファナティックな軍国主義者を狂人として書くこと、それにまさる痛烈な諷刺はない<sup>12)</sup>」と述べるように、戦後に「気違ひ」という形で戦争を持ち込むことによって浮き彫りになる「戦争の狂気」という構図に関しては、大方の論考が支持している解釈<sup>13)</sup>である

1 中村江里『戦争とトラウマ 不可視化された日本兵の戦争神経症』(吉川弘文館、2018年、p.282)。

2 中村前掲書、pp.306-307。

3 本稿ではその一部を挙げるに留めるが、全集はもちろん単行本として『遙拝隊長』(改造社、1951年)、『黒い壺』(新潮社、1954年)、『本日休診・遙拝隊長他四篇』(角川書店、1953年)、作品集として『井伏鱒二作品集第五巻』(創元社、1953年)、『井伏鱒二集』(新潮社、1970年)など、所収本は非常に多い。

4 悠一のモデルについては、井伏自ら語っており、女学生から聞いた「狂気の発作を起すたびに砂浜に出て戦争の真似ごとをする」元陸軍伍長の様子と、井伏自身が体験した「徴用されてマレーで見た某指揮官」の性格や戦地における風変わりな行動(「ことごとく東方に向けて遙拝させていた」など)を取り入れたとしている(井伏鱒二「名作取材紀行24 遙拝隊長」(『週刊読書人』1962年6月)を参照)。他に「私の万年筆」(『文芸読物』1948年12月)、「犠牲」(『世界』1951年8月)でも述べているほか、伴俊彦「井伏さんから聞いたこと」(『井伏鱒二全集十三巻』月報、筑摩書房、1975年)でも、言及されている。

5 「遙拝隊長」の引用はすべて初出時(『展望』1950年2月)のものである。

6 「遙拝隊長」は、白井明が「戦後日本の何となく悲しい気分を見事に描き出している」(『小説短評』「夕刊読売」1950年2月4日)と述べるように、発表当初から比較的高評価であった。また、『読売新聞』の「1950年読売ベスト・スリー」(朝刊、1950年12月25日、p.4)において10人中4人(河盛好蔵・伊藤整・白井吉見・中野好夫)がベストスリーに「遙拝隊長」を挙げている。

7 栗坪良樹「『遙拝隊長』—戦争ワカホリック—」(『国文学解釈と鑑賞』1994年6月、p.133)。

8 栗坪前掲論の他に、銃後の加害性について述べたものに「庶民」の噂話の表象という視点から分析を行った河崎典子「井伏鱒二『遙拝隊長』論—「言葉」の戦争」(『成城国文学』1995年3月)がある。

といえる。この意味で「遙拝隊長」は、井伏の強い戦争批判の作品として読まれてきたのである。

だが、果たして「遙拝隊長」が達成したのは、戦中／戦後、転換前／転換後という二項対立的な構造による戦争批判だったのだろうか。安藤宏は、占領期の文学について、8月15日を境とした二つの時代を断絶として捉えるのではなく、「断絶」に目をこらし、そこに引き裂かれるわが身のありようを真摯に語ろうとしたことばの数々<sup>14</sup>を読むことの重要性を指摘している。50年代初頭に登場した「遙拝隊長」についても、同様の視角からの読み直しが必要なのではないだろうか。

本稿では、岡崎悠一を同時代に多く存在していた「傷痍軍人」<sup>15</sup>の一人として捉え、傷痍軍人イメージの変容や、近年の軍事援護研究を参照しながら、悠一の「気違ひ」そして「びつこ」と負傷する足の描写を分析し、戦争という経験の断絶をどのように描いたかを考察する。戦後社会において、悠一が傷痍軍人、つまり戦争の「傷痕」を残す人物として描かれることによって、価値の転換を受け入れ手のひら返しをしたかのように見える人々の中にもまた、「傷痕」としての戦争の時間が確かに存在するということが浮き彫りになるだろう。そしてそう考えた時「遙拝隊長」は、価値の転換という敗戦後の時空間に付されてきた物語そのものを問い直す契機となりえるのではないか。

## 2 同時代の傷痍軍人イメージ

傷痍軍人とは、1931年兵役義務者及癩兵待遇審議会の答申により、制度上統一された呼称<sup>16</sup>であり、広義には戦闘または公務による傷痍疾病によって「不具癩疾」となり、増加恩給や一時金を受ける者のことを指す<sup>17</sup>。「遙拝隊長」では、作品内に傷痍軍人という用語は登場しないものの、悠一は「傷病兵」と表現されており、以下のような説明がある。

悠一は、トラックから振り落されたとき左足の脛を折つて、同時に腑抜けのやうになつたのである。クアラルンプールからゲマスといふ町に向け、トラックで急行軍して行く途中のことであつた。

たとえ事故であつたとしても、行軍中であること、また「戦争中は手当も充分にあつた」と金銭的な扶助について書かれることから、傷痍軍人として読むことができるだろう。では当時、「傷痍軍人」悠一を取り巻く環境は、どのようなものだったであろうか。結論を先取りすれば、傷痍軍人イメージは戦中から戦後にかけて、称揚されるものから、社会問題の対象へと、一種の転落とも呼べる変容を経ていったのである。

戦時中において、戦地での負傷は名誉である。『朝日新聞』において「療養所も決戦生活」<sup>18</sup>と、「再起奉公」が話題となり、「傷痍勇士の結婚促進に進軍／大

9 大原祐治「教科書」的規範の機能—井伏鱒二試論(二)・「遙拝隊長」について」(『学習院高等科紀要』2008年7月)。

10 滝口明祥「ある寡婦の夢みた風景—「遙拝隊長」『井伏鱒二と「ちくはぐ」な近代』、新曜社、2012年。

11 「気違ひ」に着目した論考として、大越嘉七「井伏鱒二と抵抗文学—「鐘供養の日」「遙拝隊長」—」(『研究と評論』1964年11月)、吉田永宏「『遙拝隊長』」(『国文学解釈と鑑賞』1985年4月)、松本武夫「井伏鱒二「遙拝隊長」論」(『立正大学大学院紀要』2002年3月)、岩淵剛「近現代文学探訪(55)井伏鱒二「遙拝隊長」」(『民主文学』2003年1月)がある。

12 東郷克美「井伏鱒二素描—「山椒魚」から遙拝隊長へ」(『日本近代文学』1966年11月、p.158)

13 戦争と悠一の「狂気」の関係性について述べた論考は、鶴田欣也「「遙拝隊長」論」(『井伏鱒二研究』、明治書院、1990年)、小菅健一「「遙拝隊長」論—形象化された戦争と〈運命〉の縮図」(『山梨英和短期大学紀要』2001年6月)、大嶋仁「小林秀雄と井伏鱒二の「戦後文学」」(『比較文学研究』2008年6月)、大原祐治「「陶酔の境」への想像力—井伏鱒二「遙拝隊長」について」(『想像力がつくる〈戦争〉／〈戦争〉がつくる想像力』、近代文学合同研究会、2008年)などがある。

14 安藤宏「章解説」(「第二章 小説「断続」を「断続」として語ることば」『占領期雑誌資料大系 文学編Ⅲ 第三巻』岩波書店、2010年、p.95)。

15 佐野利三郎「傷痍軍人処遇の改善は」(『社会事業』1952年1月)によれば、傷痍軍人の数が、1948年、厚生省の全国身体障害者の実態調査によって、15万5918人であると発表されている。

16 呼称変更の経緯については郡司淳「軍事援護の世界—軍隊と地域社会」(同成社、2004年)の「第五章 「保護」の名の下に」が詳しい。

日本婦人会」<sup>19</sup>と、結婚が奨励されるように、傷痍軍人に関する話題の多くは美談として語られた。それは悠一の故郷の村人たちが「この隣組内に将校が帰つて来ると鼻が高いといふわけで、隣組一同で悠一の退院促進の件を決議した」という態度にも表れている。

しかし敗戦を迎えると、その傾向にはわかに変容する。占領期について、同じく新聞記事にその影響をたどれば「援護事業を強化／傷痍、帰還の軍人、戦災者など／厚相、一般の協力要望」<sup>20</sup>、「軍事援護ます／強化」<sup>21</sup>とあり、社会保障の不足が議論され、実際に対策もとられた<sup>22</sup>。また「傷痍軍人、半数は失職／昨年九月にくらべ二十倍」<sup>23</sup>のように傷痍軍人を敗戦の象徴的な存在として前面に押し出す記事も見られ、傷痍軍人を取り巻く環境が、決して恵まれたものではないことがうかがえる<sup>24</sup>。植野真澄が指摘するように、復員兵の再就職が活発化するのに比例して、労働力のインフレと飽和が問題化していた<sup>25</sup>。そして負傷した身体を抱える傷痍軍人たちは、その多くが失業した。戦時中称揚され続けた彼らは、希望の雇用条件に妥協を許さない者もあり、病院を出られず、街頭募金によって生計を立てる人々も少なくなかった<sup>26</sup>。

当時の状況は田中澄江のルポルタージュ「相模原の傷痍軍人達」に詳しい。田中は病院側の「いつまでもいてもらつては病院が困ります。といつてみす／不自由なひとに出ていつてくれとは言えません」という言葉や、傷痍軍人たちの「職業安定所の係が来て履歴書を書かせる時、相模原病院という場所を住所にすると言われる」という言葉を紹介し、傷痍軍人を抱える病院の実態と職業支援の難しさを訴える他、厚生省厚生課長の次のような言葉を紹介している。

日本は未曾有の大敗戦をしたんだ。八百万の引揚が狭い国にくる…全国に焦土がある。戦闘員でないものも家を焼かれ命をおとしているんです…その時軍部が悪い…俺らのせいじゃない…俺らはもつとよい待遇してもらう権利があるなんてこと許り考えないで、とにかく更生意識でやつてもらいたいなあ。<sup>27</sup>

ここでは傷痍軍人の生活苦について述べる一方で、傷痍軍人側への要望を取り上げることによって、必ずしも傷痍軍人を被害者として守るだけでは解決しない問題があることも伝えられている。

また、『読売新聞』の第62回紙上討論において、「傷痍軍人の募金をどう思うか」という議題が提出された<sup>28</sup>。「講和の締結とともに日本の再軍備が懸案化した現在いまだに姿を消さぬ白衣の募金が論議的となつているとき、この問題をとりあげた第六十二回紙上討論は果然大きな反響をよび投稿数七百廿九通の多きに達した」という文面からは、同時代の傷痍軍人問題への関心の高さが垣間見える。掲載された投稿文の見出しを確認すると「生活の保障与え 組織化を認めよ」・「保護対策に欠ける」・「大目に見るべし 時代と政治の犠牲者」という擁護派が見られる一方で、「いまでは募金屋 集った金は享楽費」・「努力が

17

定義は、郡司淳「傷痍軍人の視座から戦争の時代を読み解くために」(『傷痍軍人・リハビリテーション関係資料集成第一巻』、六花出版、2014年)を参照した。

18

『朝日新聞』夕刊、1943年11月26日、p.2。

19

『朝日新聞』朝刊、1943年12月24日、p.3。

20

『朝日新聞』朝刊、1945年8月30日、p.2。

21

『読売新聞』朝刊、1945年8月22日、p.2。

22

その他にも「復員軍人へ再起の道標 職業補導会の計画」(『朝日新聞』朝刊、1945年9月16日、p.2)や「社会奉仕に奮闘 学生同盟発足」(『読売新聞』朝刊、1947年5月27日、p.2)の中で、傷痍軍人支援を含めた軍事援護に対し前向きな姿勢がうかがえる。

23

『朝日新聞』朝刊、1946年4月15日、p.2。

24

当時、保障問題への対策がない訳ではなく「傷病兵慰問など／首相指示自由党が全国に展開」(『読売新聞』朝刊、1950年8月25日、p.1)、「傷痍軍人の恩給引上げ」(『毎日新聞』、1951年4月27日、p.3)の記事があるが、ここでは同時に問題としても浮上していることを確認したい。

25

植野真澄は「傷痍軍人・戦争未亡人・戦災孤児」(『岩波講座アジア・太平洋戦争 6 日常生活の中の総力戦』岩波書店、2006年)において、失業問題について述べている。

26

募金の問題は他にも、『読売新聞』の「“偽白衣”を見破る ホン物傷痍軍人の六感」(朝刊、1950年3月12日、p.2)や「ニセ物もいる白衣の演奏者 募金して高利貸」(朝刊、1951年11月29日、p.3)などがある。

27

田中澄江「相模原の傷痍軍人達」(『中央公論』1952年10月、p.154)。

28

第62回紙上討論「傷痍軍人の募金をどう思うか」(『読売新聞』朝刊、1951年2月20日、p.2)。

足りない」・「人々の同情につけ込む」と批判もあり、賛否両論である。また総括において、投稿者の「約八十%までが白衣募金の存在を一日も早く一掃したいと願望している」ことが言及されている。

この討論の投稿者の内訳が「投稿者の職業別は、無職が一番多く、このうちには目下療養中の傷病者が多数あり、学生、官公務員、会社員がこれに次いで多かつた」と述べられていることから、投稿された意見に偏りが無いとはいえない。ただここで明らかなのは、すでに傷痍軍人は称揚されるものでも美談化されるものでもない、ということである。当時の傷痍軍人は、哀れで、時に厄介者なのである。「遙拝隊長」の岡崎悠一が生み出されたのは、このような時代においてであった。次節以降では、悠一の「気違ひ」と「びつこ」について考えていきたい。

### 3 「気違ひ」と〈未復員〉

悠一の「気違ひ」については、冒頭に詳しく説明されている。

発作を起してみないときの悠一は、内地勤務をしてあるものと錯覚し、発作を起したときには戦地勤務中だと錯覚してあるやうである。ほぼ、そんなやうに大別することが出来る。発作中の彼は、たとへば通りすがりの人に、いきなり「おい、下士官を呼べえ。」と大声で怒鳴りつけることがある。

この症状については、内田友子が〈未復員〉との類似点を指摘している<sup>29</sup>。〈未復員〉とは、未だに戦中、もしくは戦後間もない時を生き続けている元兵士たちを指す言葉である<sup>30</sup>。TBSのプロデューサーとして、ドキュメンタリー番組『〈未復員〉』シリーズ<sup>31</sup>を制作した吉永春子による、国立武蔵療養所<sup>32</sup>・S医師への取材によれば、〈未復員〉は「未だ復員せざる人と書きますが、いわゆる南方等にいる未帰還兵とは、違います。この人達は、戦争中、精神障害をおこした元兵士達です。今でも戦争体験が頭から離れない<sup>33</sup>」と説明されている。また、その症状として「白衣の医師を見ると、“軍医殿!”と敬礼をする元兵士の人もいます。また、毎朝、軍人勅諭を朗読する患者さんもいる」などの例が挙がっている。また、天皇の話題になると、皇居遙拝をする患者も紹介されている<sup>34</sup>。

内田は「岡崎悠一を、狂ったままにしておいていいのだろうか?」<sup>35</sup>という問題意識のもと「遙拝隊長」を論じ、吉永の成果を参照しながら〈未復員〉の問題に触れている。悠一が負傷の詳細を語らないことや「一時は臍の気違ひではないかといふ噂もあつた」という描写を取りあげ、以下のように述べる。

彼は、戦争体験が頭から離れないから病んでいる、というわけではない。何らかの障害から戦後社会に順応することができないために、唯一、かつて自己同一化を可能にしていた従軍生活、滅私奉公の生活に、未だ依存し

29

内田友子「語らない復員者たち(上)井伏鱒二「遙拝隊長」(『九大日文』2002年8月)、内田友子「語らない復員者たち(中)玉音放送の風景と井伏鱒二「遙拝隊長」(『九大日文』2003年2月)にて指摘。またそれを受けて加納実紀代「〈復員兵〉と〈未亡人〉のいる風景」(『戦後日本スタディーズ』①…40・50年代)紀伊國屋書店、2009年)では、悠一を精神的〈未復員〉と表現している。

30

〈未復員〉とは、一九四七年に施行された「未復員者給与方法」に基づく呼称である。当然、外地の未復員兵のための支援政策でもあったが、第八条の二に「厚生大臣が、未復員者が自己の責に帰することのできない事由に因り、疾病にかり、又は負傷し、復員後療養を要するものと認めた場合においては、復員後三年間、その者に対し、必要な療養を行う」とあり、外地にて傷を負った兵士たちも受給対象者であった。のちに〈未復員〉者たちは、「戦傷者特別援護法」に基づき、手当を受け取ることとなる。

31

吉永春子はTBSのプロデューサーとして、1970年8月にドキュメンタリー『〈未復員〉PART・I』、1971年8月15日に『〈未復員〉PART・II』、1985年2月4日に『〈未復員〉PART・III』と継続的に取材、番組作成を行い、放送後も交流を続けた。

32

国立武蔵療養所は、1986年10月、国立精神・神経センター武蔵病院と改称。

33

取材の過程については吉永春子『さらいの〈未復員〉』(筑摩書房、1987年、p.12)を参照。

34

吉永前掲書より、皇居遙拝の記録部分を引用する。患者へのインタビュー内に「――何の為に戦地に行くのですか? / (長い沈黙……) / 「国の為です」 / ――天皇陛下の為に……。 / (深い溜息のあとに、しばらくして……) / 「行きます」 / そう言うと、中田さんは立ち上って、反対方向に向いて、深々と頭を下げた。 / 「誰に礼をしているのですか?」 / O医師の質問に、中田さんは答えた。 / 「皇居に向かって遙拝をしているのです」』とある。

35

内田前掲論(上)、p.150。

ているのだ、と。だとすれば、彼は「気違ひ」というシェルターの中で、自らについて語るという行為を放棄することによって、彼自身を守り得ているのではないだろうか。<sup>36</sup>

吉永が取材した〈未復員〉の中には、戦争に縛られながらも、戦争の終結を認識している人々もいる。内田は〈未復員〉たちが客観的・社会的に自らを理解していることから、悠一が「気違ひ」のまま語らない姿を、一種の自己防衛として分析する。内田論は、悠一と〈未復員〉の類似を指摘したという点で先駆的で、「玉音放送」言説など歴史的な文脈を補助線に、悠一について分析を行うものの、悠一を同時代の「語らない復員者」として位置づけ、時代の変容を受け入れた人々とは区別して論じるにとどまり、〈未復員〉としての悠一が「遥拝隊長」の中でどのようなはたらきを持っているかについては考察がほとんどみられない。そのため、本稿ではこの〈未復員〉の問題をもう少し詳しく見ていきたい。

まず軍事援護研究を参照すると、〈未復員〉を含めたいわゆる「精神障害兵士」については、清水寛をはじめ、近年研究が相次いでいる領域である<sup>37</sup>。しかし、中村が指摘するように「傷痍軍人」とは身体に傷を負った人びとであり、心の傷が傷痍軍人援護でどのような位置をしめていたのかについてはほとんど明らかになって<sup>38</sup>おらず、精神の傷は現代でも非常に見えにくい問題とされている。

その点で非常に示唆的なのが、清水光雄の「傷病兵はもてはやされたが、精神病患者は別だ<sup>39</sup>」という、傷痍疾病の種類による待遇の差異の指摘である<sup>40</sup>。このように傷痍軍人の中には、身体の負傷か精神の失調かという線引きがあった。それは「遥拝隊長」の村人たちが「びつこ」に関しては「どうして足がびつこになつたか」と尋ね、「びつこになつた事情が全然わからないといふ法はないだらう」とその事情を詮索する一方、発作については「気違ひのすること」なので「見て見ぬふりをして」いた、という態度の差異にも通じている。

いまなお見えにくい兵士たちの心の存在は、「遥拝隊長」の掲載当時、さらに不可視化されていただろう。特に悠一のように退院し故郷に戻った人々の情報は非常に少なく、中村は、「中には戦争が終わって生きて故郷に帰った人々もいただろう<sup>41</sup>」と推測はするものの、詳細については調査が必要としている。悠一は、傷痍軍人と同様の特徴を持ちながらも、一度も傷痍軍人として明確に表記されることはない。それは、傷痍軍人として顧みられることのなかった〈未復員〉たちとの類似をさらに強くしているといえる。この作品は、戦争の言説の中で語られることがほとんどなかった〈未復員〉の人々が、確かにそこにいたという事実を浮上させる点で、極めて独自性の高い問題を提出しているだろう。

さらに考えてみれば、悠一が〈未復員〉と類似している点は発作の症状だけではない。内田が触れているように、〈未復員〉たちは非常に客観的に病院の外の世界を受け止めていた。悠一の場合も同様で、非常に見えにくい形ではあるが、時間の二重性をもった人物として描かれている<sup>42</sup>。先行論においては、「発作」

36

内田前掲論(下)、p.144、傍点は内田。

37

昨今、戦争神経症の専門治療機関であった国府台陸軍病院の「病床日誌」の研究や、資料集成『精神障害兵士「病床日誌」』(全3巻、六花出版、2016-2017年)など、資料の刊行も盛んである。

38

中村前掲書、p.77。

39

清水光雄『最後の皇軍兵士』(現代評論社、1985年、p.114)。

40

清水光雄は他にも「精神病患者は傷病兵の数には入れない、というのが一般的空気だった」と述べる(前掲書、p.115)。また、千葉市傷痍軍人会・土川忠氏の「神経系統の病気は外からではわかんない。普通と同じにとんだり、はねたりしているのに、どうしてあの人傷痍軍人なのといわれる」(前掲書、p.118)という言葉を紹介する。

41

中村前掲書、p.264。

42

時間の二重性の問題に関しては、相原和邦「井伏鱒二の戦後——その視点構造と情念」(『近代文学試論』1983年6月)にて示されるが、言及に留まっている。

により常に戦時という“現在”の時の中に存在し、その“現在”という時空以外には存在し得ぬ人物<sup>43</sup>など、悠一について「時を止めた人物」という解釈がしばしば見られるが決してそうではない。客観性や社会性を奪われたように見える悠一も、戦後を生きている。それは「野良仕事の手伝ひや傘張りもする。それに縄なひ機械を操縦したりするほどの器量も持つてゐる」と、家で仕事をする描写からもうかがえる。悠一は、軍人を続けている戦争の時間に縛られながらも、戦後の時間を確かに生きており、そこには時間の二重性が発生している。むしろ正確に言えば、悠一の身体は戦後にあり、そこで生活を営みながら、頭の中で終わらない戦争を抱え続けたのである。

精神障害兵士を論じた清水寛の「自分は〈兵隊〉であるという意識のまま亡くなっていった者もあり、(中略)原爆の被爆者や「従軍慰安婦」と呼ばれた戦時性被害者と同じく、元・戦傷精神障害兵士にとっても戦争によって心身に負った深い傷と痛みはいまだに癒えていない<sup>44</sup>」という言葉から、現在の我々は、作品内の時間の後にも、悠一が引きずり続けるであろう戦争の時間を想像することができる。

「遙拝隊長」が浮き彫りにしてきたものは、敗戦を境とした手のひら返しや、浮き彫りとなった戦争の狂気というよりも、むしろ二つの時代が大きな変容を内包しながらなお、地続きであるという連続性だったといえるだろう。戦後が戦争の後にしか存在しないものである以上、悠一のような顕著な症状を持たずとも、多くの人々が戦争の記憶を「傷痕」として抱えていることに違いはなく、「二つの時計」を持たなければならないからその齟齬は、作品内の村人たちにもあてはまる。悠一の発作は対人的な場面で強く発揮され、そのために「こうちがめげ」、村の日常に破綻をきたす。村人たちは様々な憶測を交わし、悠一を疎みながらも、時に支え、受け入れる。そしてそのたびに戦時が呼び起こされる。ここでは、語らない悠一の抱えた「傷痕」を通して村人たちの無数の「傷痕」をも見ることができるだろう。

#### 4 負傷する足と「びつこ」

悠一の「傷痕」として描かれるのは、「気違ひ」だけではない。清水昭三が「無残」——これこそ深い戦争観に達する思想なのだ。有為なものは残らない。すべて無残である。ひたすら無残である。なにかが残るとすれば、それは精神と肉体の荒廃だけが残るにすぎない<sup>45</sup>と語るように、悠一は精神の荒廃である「気違ひ」の他に、肉体の荒廃、つまり「足」の傷を抱えた存在として描かれている。戦時中、東方遙拝のために「きたない溝川の水でもかまはず沐浴し」、「ジャングル瘡」を患った場面より始まり、戦後の「びつこ」に至るまで、悠一の足は徹底的に舐まれている。足の負傷は「骨折の癒着は保証のこと疑ひない」と診断される上、「朝早く軍服姿で歩くのも、びつこを治すために調練運動してゐるぐらゐ

43

松本武夫「井伏鱒二「遙拝隊長」論」(『立正大学大学院紀要』2002年、p.74)。

44

清水寛『日本帝国陸軍と精神障害兵士』(不二出版、2006年、pp.322-323)。

45

清水昭三「井伏鱒二論—「遙拝隊長」を中心に」(『新日本文学』1982年1月、p.68)。

に思はれていた」と、常に治すことが目標とされているにも関わらず、悠一は「びつこ」のままである。このような悠一の足に付された意味とはなんだろうか。

まず、足に関する描写が、悠一のアイデンティティの分裂を表すメトニミーとして有効にはたらくしているといえるのが、負傷後、軍の装備を脱がされる場面である。この場面では、野戦病院に搬送された悠一の長靴をめぐって、以下のような問答が交わされる。

担架から治療室に移された隊長は、開襟シャツを着て軍袴に黒い長靴をはいてみた。

「なぜ、靴をば脱がさんのだ。」と、いきなり軍医が、上田従卒を叱りつけた。

「左足の脛が、骨折らしいのであります。靴を抜きとらうとしますと、さうすると非常に苦痛を訴えられるのであります。」と、上田従卒が答えた。

「それならば、なぜ右足の靴をば、脱がさんのだ。第一、衛生兵が怪しからん。」と軍医がまた叱るので、上田従卒は隊長の右足の靴を抜きとつて、担架兵に渡した。

悠一を運んだ上田は、靴を片方だけ脱がすことを躊躇し、その理由を「隊長である軍人に、長靴の片方だけ履かせるのは、自分らの威厳にもかかはる」と語る。また、続く場面では長靴のみならず下半身の装備が剥奪されていく。

隊長の左足の靴は、軍医の部下が縦に切り開いて床の上に放り出した。軍袴も股から下を縦に切り裂いた。露出した隊長の左足は、患部だけでなく、脛から下全体が腫れあがって来た。

右足の靴は「抜きと」られ、後に「びつこ」が残る左足の靴は「切り開」かれる。また、軍袴は「切り裂」かれる。藤田昌雄によると、長靴は軍人の基本的な装備として用意されるようである<sup>46</sup>。また、五十嵐恵邦は、「愛國的な身体を作り上げるという軍隊の任務」のため、「あてがわれた軍靴に、痛みを無視して、自分の足を合わせるよう教育された」と論じている<sup>47</sup>。つまり靴を含めた軍の装備を身に着けて任務に従事することは最重要とされていたのである。作品内でも、「軍靴をはいたまま、まつさきに川のなかに飛び込んで」という描写があるように、その装備は、簡単に解かれてよいものではないのである。

もっとも、その場面に関しては、すでに映像学の研究に指摘がある。小倉史は映画『本日休診』(1952年、渋谷実監督)中の人物、岡崎勇作のモデルが悠一であることを指摘した上で、こう述べる。

軍靴(長靴)が表象するものは、遥拝隊長・悠一が戦後背負うことになる「後遺症」の直接の要因だけにとどまらない。(中略)それが軍医の部下によって「引き裂かれる」という構図は、彼の軍人としてのアイデンティティが分裂してしまうことを意味する。<sup>48</sup>

小倉の論点を借りれば、「遥拝隊長」において長靴は、軍人としてのアイデン

46

藤田昌雄『写真で見る日本陸軍兵營の生活』(光人社、2011年)。

47

五十嵐恵邦『敗戦の記憶——身体・文化・物語 1945-1970』(中央公論新社、2007年、p.84)。

48

小倉史「彷徨えるアイデンティティー 松竹大船喜劇と〈復員兵〉イメージ」(『愛知淑徳大学メディアプロデュース学部論集』2012年3月、p.60)。

ティティを表象するものとしてはたらいている。そうであるならば、靴を含めた装備を引き裂くことは、軍人アイデンティティを引き裂くことを示すという意味においてメトニミーとして捉えることができるだろう。

さらに本論では、作品内において、その分裂を示す表象がこの場面のみでは終わらないことを指摘してみたい。戦後、笹山部落における悠一は、「軍帽をかぶつ」た軍服姿であり、発作を起こすと、「青年の肩をつかんで辻堂の縁の下に押し込」んだり、「墓を一つ一つベルトで撲りつけ」たりする。それらは主に上半身の動作であるが、足元については長靴・軍袴の描写はなくなり、「びつこ」という言葉のみで語られる。長靴を脱がされ、軍袴を「切り裂かれ」た悠一の分裂は、戦時中だけではなく、戦後においても表象の量的なレベルで持続される。その分裂の持続によって、実際に「切り裂かれ」たのは軍袴だけではなく悠一自身であること、つまり精神は戦時にありながら、悠一自身の身体は戦後へと強制的に「切り裂かれ」ているということが示されている。

## 5 「びつこ」と引きずる足

では、戦後へと運ばれた身体についてはどのようなことが言えるだろうか。

悠一の「びつこ」について中心に論じた先行論はなく、清水が「肉体の荒廃」と述べたのみである。小菅健一は「よその部落には逃げないので、うつちやつておいても大したことはない」などの描写を取り出して、「岡崎悠一の限られた行動範囲のパターン」を指摘しているものの、「びつこ」についてはほとんど取り扱っていない<sup>49</sup>。しかし前述のように、「気違ひ」な悠一という設定にはモデルが存在するが、井伏はその軍人像にさらに「びつこ」という傷を付与しており、この点については注目する必要があるだろう。

山口昌雄は手に比して足が「暗喩的表現に適している<sup>50</sup>」と指摘する。特に日本語において、「足許を見る」・「足蹴にする」・「不足」など、足が「人間行為のマイナス部分のメタファーとして酷使されている<sup>51</sup>」ことを明らかにしている。ここで論じられている足の暗喩的表現、つまりメタファーとの結びつきを援用すれば、今まで論じられることのなかった悠一の「びつこ」の描写の有効性を考えることの可能性が見えてくるのではないだろうか。以下に、悠一の「びつこ」の描写について確認しておく。

たとへば通りすがりの人に、いきなり「おい、下士官を呼べえ。」と大声で怒鳴りつけることがある。(中略)そんな場合、たいていの人は逃げ出すのがおきまりだが、悠一はびつこだから追ひかけて来ることだけは断念する。その代りに、逃げ出して行く当人は、背後から「逃げると、ぶつた斬るぞを。」といふ、怖い言葉を浴びせかけられることになる。

「追ひかけて来ることだけは断念する」悠一からは、小菅が指摘したような

49  
小菅前掲論、p.6を参照。

50  
山口昌男「足から見た世界」(『別冊国文学』1985年1月、p.133)。

51  
山口前掲論、p.128。

「行動範囲のパターン」がみられる。このように「びつこ」は悠一の側からすれば移動の制限であるが、村人からはどう見えているだろうか。悠一は「怖い言葉」を浴びせながらも、実際には「びつこ」の行動制限により、「ぶつた斬る」ことができない。もし「びつこ」がなければ、悠一は恐怖の対象になりかねないが、「びつこ」のために、そこで人々が抱く印象は恐怖ではなく滑稽さである。村人からみた悠一の動作について、作品内での描写は多くないが、内地勤務の慣習として、日常的に村を歩き回る悠一が「歩くのは不得手」と書かれていることから、歩くという動作<sup>52</sup>の時点で、すでに「びつこ」であることが人々の目に見える形で現れていたと考えられる。

「びつこ」の移動について、その動作をいくつかの資料から参照すれば、例えば、橋本貞治の詩「跛の乞食」に、「誰が好んで跛なんかひくもんか<sup>53</sup>」という一節がある。また、『朝日新聞』「びつこ隊長・聾の指揮 十倍の敵を殲滅 卅九人丸の大殺陣」では、負傷した軍人が突撃する美談を「びつこを引きつゝ前進々々」と駆出した<sup>54</sup>と伝えている。そして、児童文学の、エジウォス『びつこのジャック』では「すこしびつこはひくが、なおつて起きあがつた時には、またく生れかわつた人間になりました<sup>55</sup>」という表現がみられる。

ジャンルや媒体の違う資料を列挙したが、以上の例から明らかなのは、「びつこ」がしばしば「引く」という動作で語られるということである<sup>56</sup>。仮に「選擇隊長」にもその動作を取り入れるとすれば、村人にとって悠一の傷ついた足は、「引く」という形で可視化されており、さらにいえば読者にもそのようなイメージで流通していた可能性が見えてくる。

また、このような歩行の動作について考えるにあたり、下肢損傷を負った傷痍軍人の、同時代における報道の記述をいくつか確認しておきたい。『読売新聞』上では、「就職や扶助料まで／傷痍軍人救った小笹刑事に総監賞<sup>57</sup>」という記事にて、左足の不自由な傷痍軍人が、職業教育を受けられず困窮する様子と、窮地を救った刑事の功績が報じられたほか、「隻脚の元少佐盗み<sup>58</sup>」のように、犯罪に走る傷痍軍人の記事もいくつか見られる。しかしここでは動作の描写はない。

本論で特に注目したい記事は「戦争の犠牲 夫婦二人三脚 歩み切れなかつた人生街道」<sup>59</sup>である。そこでは松葉杖の傷痍軍人と妻の、宿泊先で起こした窃盗事件が「戦争の犠牲となつた傷痍軍人夫婦がインフレの波にもみくちやになり罪をおかした町の哀話」として紹介される。また、その事件は「片輪なので逃げ切れず」に捕まる、という形で解決する。さらにこの記事には後日談があり、同情した人々が寄付を寄せたことが判明している<sup>60</sup>他、『読売新聞』上のコラム「いずみ」でも同様の事件が話題となっており<sup>61</sup>、数日間にわたって取りあげられた比較的大きな事件である。

ここで特徴的なのは「二人三脚」という夫婦二人で支え合う表現や、「歩み切れなかつた」という歩行の失敗を描く表現などにみられる、足に関する表象である。これらは記事内の「松葉杖」・「片輪なので逃げ切れず」という、傷痍軍人

52

「歩く」ことについては、ジョン・アーリー『モビリティーズ 移動の社会学』（吉原直樹・伊藤嘉高訳、作品社、2015年）も示唆を与えてくれる。そこでは「歩くことを通して、周りの環境が知覚され、認識され、生きられる」（p.100）と、歩行を考えることの重要性が述べられる。

53

橋本貞治『跛の乞食：詩集』（全日本農民詩人連盟、1932年、p.3）。

54

「びつこ隊長・聾の指揮 十倍の敵を殲滅 卅九人丸の大殺陣」（『朝日新聞』朝刊、1937年11月2日、p.11）。

55

エジウォス『びつこのジャック』（秋山淳訳、宝雲舎、1948年、p.19）。

56

「「びつこ」を引く」という表現は他にも「後宮少尉とピッコ犬」（歩兵第六十一連隊将校団『皇軍の華 後宮少尉の傍』歩兵第六十一連隊将校団、1937年、p.213）に「ピッコの犬はピッコをひき〜について来ました」とある。『読売新聞』にも「健康相談／関節が曲らない」（朝刊、1950年10月3日、p.3）において「少しびつこを引きます」という表現も見られる。

57

「就職や扶助料まで／傷痍軍人救った小笹刑事に総監賞」（『読売新聞』朝刊、1951年11月21日、p.4）。

58

「隻脚の元少佐盗み」（『読売新聞』夕刊、1951年11月14日、p.2）。

59

「戦争の犠牲 夫婦二人三脚 歩み切れなかつた人生街道」（『読売新聞』朝刊、1947年6月28日、p.2）。

60

「零落の夫婦に起訴猶予 同情金も集まる」（『読売新聞』朝刊、1947年6月29日、p.2）

61

「いずみ」（『読売新聞』朝刊、1947年6月30日、p.2）。ここでは釈放された夫婦の行方がわからないことから、身を案じる声を取りあげられる。

の足の不自由さと呼応するよう、意識的に選択されているように読める。このように実際の出来事を扱った新聞においても、傷ついた足の表象のメタファーの使用がみられる。以上のような例を考えた時、「遙拝隊長」においても同様に、「びつこ」は歩行の困難さを描くものとして捉えられる。さらに「びつこ」は「引く」という動作で語られることが多く、作品内での悠一の歩行の困難さは足を「引きずる」ことによって可視化されていると仮定できる。では、ここにどのようなメタファーを読むことができるだろうか。

もとより「びつこ」という設定自体は文学作品の中では珍しいことではない。少し例を挙げれば、漱石の「吾輩は猫である」においては、車屋の黒が「びつこ」になる猫として描かれている。その場面で強調されるのは語り手である「吾輩」との差異である。「乱暴猫」として登場した黒の負う「びつこ」は「吾輩」の「先々健康で跛にもなら<sup>62</sup>ない」という描写とは対照的であり、黒と、その知己でありながら距離を置く「吾輩」との差として描かれる。

他にも、小川未明は童話において多くの「びつこ」を描いている。それは少年少女の場合もあれば、動物や人形の場合もある。「酒倉」に登場する正直者の少年<sup>63</sup>や「日がさとちよう」の少女<sup>64</sup>は、「びつこ」であることで移動の制限が付与され、物語の展開に必要な設定として活かされている。さらに「跛のお馬」では、重い荷をつけた「跛」の馬が登場する<sup>65</sup>。そしてその馬の「跛」の描写は、馬を哀れに思い「跛」を治したいと願う少年の健気さを際立たせるものとして機能している。「びつこ」という傷を登場させることによって、相対する人間の健気さや優しさを強調するという意味においては、芥川の「地獄変」において、父・良秀と同じ名を持つ「跛」の子猿をかばう娘という構図も、同様の効果を示しているといえるだろう<sup>66</sup>。

このように「びつこ」は文学史において幾度となく描かれてきた表象ではあるが、ここで指摘したいのは、「遙拝隊長」前後の文学においても、足の負傷や歩行の困難の表象は散見されるが、その傷の理由の多くが、戦争という一つの出来事に関連づけられているということである。

例えば田宮虎彦「異端の子」では、良一という子どもが、腰椎カリエスによって、「両脚が意のままにならぬ<sup>67</sup>」状態になるが、その原因は戦争での栄養失調に求められている。また、村上兵衛の「軍旗」では、兵隊の「日本刀を杖に少し跛をひきながら<sup>68</sup>」という動作が見られる。また時代は下るが、遠藤周作の「松葉杖の男」では、両足が硬直してしまい診察を受ける神経症患者、加藤の足の動かない原因を、戦争時に捕虜の手足を縛り殺した、という戦争経験と結び付ける場面がある<sup>69</sup>。

椎名麟三の「深夜の酒宴」では空襲で右足首から下を失った仙三という人物が「ひどい跛」であるとされている。

それは歩くといふよりよろめいてあるといふ方がふさはしかつた。跛の方の足がやつと大地に踏み下されると、彼の上半身は倒れんばかりに右へ

62

夏目漱石「吾輩は猫である」(『ホトトギス』1905年1月、p.15)

63

小川未明「酒倉」(『読売新聞』1918年10月24日～25日)。

64

小川未明「日がさとちよう」(『週刊朝日』1924年7月)。

65

小川未明「跛のお馬」(『童話』1922年5月、後に「びつこのお馬」と改題)。

66

芥川龍之介「地獄変」(『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』共に1918年5月1日から5月22日まで連載)。

67

田宮虎彦「異端の子」(『中央公論』1952年2月、p.196)。

68

村上兵衛「軍旗」(『新思潮』1953年6月、p.77、後に「連隊旗手」と改題)。

69

遠藤周作「松葉杖の男」(『文学界』1958年10月)。

傾き、それを節くれだつた太い木の枝で懸命に支へながら左の方の脚をひきつけるのだがそのためにしばらく立止つてみなければならぬのだつた。その都度に、杖がぶるぶるふるへてゐるのである。そして彼は不安さうに、次の足を下さなければならぬ地面をちらりと確めてから、再び運命的な予感のうちに次の一步が絶望的に踏み出されるのだつた。<sup>70</sup>

70  
椎名麟三「深夜の酒宴」(『展望』1947年  
2月、pp.100-101)。

この作品では、「跛」の歩行には、一度は小運送店で社長になった仙三の、罹災による家と妻との喪失や、焼け跡に建つバラックの風景の「猥雑と疲労」が重ねられ、不安や絶望として描きこまれている。ここで「跛」は、単に足の負傷を表すのみならず、戦争による喪失や疲労を文字通り「足枷」として引きずることを意味している。以上のように、歩行が困難な中、「絶望的」にも前に進まなければならない様子は、戦後の文学の中で、まさに戦争と関連させる形で継続して描かれたものであった。

その早期のものの一つとして、「遙拝隊長」を読めば、悠一の「びつこ」の場合にも同様のことが指摘できる。負傷の直接的な原因としては、出征中における事故である。悠一は友村上等兵の「戦争ちゆうものは贅沢ぢや」という発言に対し憤り、友村を叱責し、殴りつける。その際乗っていたトラックが急に動いたことで、悠一と友村は川に落ち、悠一は負傷し友村は死ぬ。この事件の発端が、戦争の捉え方に関する口論であることを考えれば、負傷の原因は、戦争そのものにあるといえるだろう。ならば、悠一が「びつこ」を引く動作は、そこに引きずられる「戦争」を否応なく想起させるに違いない。

つまり、悠一が戦後を生きる中で「びつこ」の足とともに「引きずって」いるのは「戦争」という経験の重みそのものであると考えることができるだろう。物語の終盤、発作が落ち着いた悠一が「のろのろ」「とぼとぼ」歩く姿にも、戦争の重さを感じられるように思う。以上の考察より悠一の「びつこ」の足は、戦争を「引きずる」メタファーとしてはたらいっていると考えられる。また、当時の文学にとって歩行の困難は、戦争の「傷痕」を描くときの、ある程度共通した表象でもあったことが見えてくる。

## 6 おわりに

本稿では、「遙拝隊長」における悠一を「傷痍軍人」としてとらえ、その症状である「気違ひ」と「びつこ」について分析を行った。悠一や、悠一に対して手のひら返しの態度を示した人々の変容の姿は、まさに当時の傷痍軍人イメージを的確に取り込んだ形であるということが明らかになった。「気違ひ」については、同時代取り上げられることのなかった〈未復員〉者として、悠一を描き得たこと自体を達成として評価するとともに、悠一の持つ時間の二重性が、戦争経験を持つ一人一人の「傷痕」を表出させることについて言及した。「びつこ」や足に

関連する表現については、戦時と戦後に切り裂かれるメトニミーの表現を確認したほか、戦争を引きずり続けるというメタファーの機能について、他の言説を交えながら分析した。

本稿では最後に「遥拝隊長」における「気違ひ」と「びつこ」の表現が相互にどのような機能を果たしていたかを考察したい。悠一は、終わらない戦争を生きる「気違ひ」として描かれる一方で、その身体は紛れもなく戦後の社会を生きている。悠一が〈未復員〉のまま復員することで人々の前に前景化する戦争は、「村人に日常的に戦争を散布し続ける<sup>71</sup>」というような一方的かつ抽象度の高いものではなく、戦時を生きた一人一人にとっての、経験としての戦争である。悠一の発作に関わった人々は、悠一について語る際、同時に自らの言葉で戦争に対する価値観を語ることとなった。悠一を「軍国主義の化物」と罵った海岸町の青年の言葉や、悠一を庇った橋本屋の発言は、制度のレベルでの急激な変容を受け入れる中で、手のひら返しをしなければならなかった人々の中に残り続ける戦争の「傷痕」の表出であるといえる。悠一は村人たちを自らの戦争観に改めて直面させる存在なのである。

もちろん、悠一が持つ軍国主義的な思想や、手のひら返しという態度を示した銃後の加害性を不問とするつもりはない。しかし、悠一の二重の時間をもって「遥拝隊長」が読み手に突き付けているのは、戦中／戦後、敗戦を越えた／越えられなかった、という二項対立的な構図を打ち立てての戦争批判のみではなく、その二項対立の構図を妥当なものとして受容することによって、敗戦による転換を余儀なくされることの苦しみ、手のひら返しの裏に存在していたはずの戦争の「傷痕」が見落とされていくという、戦後認識そのものに対する批判があるといえるのではないだろうか。

ただし「気違ひ」がもつ批判性はそのままでは悠一の語らない姿に回収されてしまう。その批判性、「傷痕軍人」悠一の抱える「傷痕」は、村を歩き回り戦争を引きずる姿を通して、つまり足のメタファーによってはじめて、読み手の前に露わになるのである。

「遥拝隊長」とあだ名されるほどの熱量で戦争に尽くした一人の軍人が、精神的にも身体的にも戦争の「傷痕」を引きずる傷痕軍人となるという構造は皮肉なものである。「遥拝隊長」に関する先行研究では、敗戦を「境」とみなす表現がしばしばみられる<sup>72</sup>が、まさにこの境を足で「越え」、「跨ぐ」ことの困難さが強く描き出された作品であるといえる。価値の転換の暴力性を批判するものから、戦時／戦後という時空間の問い直しへとそのはたらきを読みかえても、作品の強い戦争批判の力に変わりはない。冷戦体制の高まりや、占領期の終結など、社会全体に大きな影響をもたらす出来事を目前とした混乱の50年代<sup>73</sup>の入口から、我々は常に戦後という時間について再考する契機を与えられ続けているのである。

71  
栗坪前掲論、p.134。

72  
敗戦を「境」とする表現は、前掲の栗坪論、内田論をはじめ、多くの「遥拝隊長」論で用いられる。また、村田信男「文学にみる障害者像 井伏鱒二著『遥拝隊長』」(『月刊ノーマライゼーション』、2002年3月)においても「敗戦を境にして」という表現が用いられている。

73  
佐藤泉は『一九五〇年代、批評の政治学』(中央公論新社、2018年)において、50年代を「戦後史を語るうえで言い落すわけにはいかない出来事、時代を画する事件が引き続いた」(p.3)時代であると表現している。

[付記] 資料の引用に際し、ルビを省略し、旧字体は適宜新字体に改めた。引用内の／は改行を、(中略)は中略を示しており、傍線部および傍点は断りのない限り引用者によるものである。また、現在差別用語として認識されている語を引用・使用することがあるが、差別の意図はなく、歴史的文脈を考慮し、作品の表現を尊重するために使用する。本稿は日本近代文学会2018年度春季大会の個人発表「敗戦を跨ぐ身体——井伏鱒二「遥拝隊長」と「傷痍軍人」表象を手がかりに」に基づいたものである。また本稿は、JSPS科研費(特別研究員奨励費、課題番号19J15056)による研究成果の一部である。